

モラヴィア派入植地サレプタ

— カルムイク人との交流と宣教師の記録 —

井上 岳彦

1. はじめに

サレプタは1765年にモラヴィア派⁽¹⁾によって建設されたヴォルガ河流域の入植地である。ヴォルガ河下流の右岸、ツァリーツィン⁽²⁾の南28キロメートルに位置した。サレプタから南には広漠とした草原が広がっている。このステップには17世紀以来中央アジアから移動してきたカルムイク人⁽³⁾が遊牧生活を営んでいた。本稿はこのモラヴィア派入植者とカルムイク遊牧民の交流の歴史に注目する。

両者の関係は長く忘却された歴史でもあった。18世紀以来ヴォルガ河流域に入植したヴォルガ・ドイツ人と呼ばれた人々は、独ソ戦開始後の1941年9月にシベリアや中央アジアに追放された。⁽⁴⁾一方、17世紀からステップに住むカルムイク人もまた、1943年末に通敵行為の嫌疑でシベリアや中央アジアに民族全体で強制的に移住させられた。⁽⁵⁾スターリン批判後に名誉回復されたが、ドイツ人の自治領土が再建されなかったこととも関連してヴォルガ・ドイツ人の歴史が本格的に語られるようになったのはペレストロイカおよびソ連崩壊以後のことである。⁽⁶⁾

ヴォルガ・ドイツ人の歴史の再構築の作業の中で、徐々にサレプタのモラヴィア派入植者とカルムイク人の関係も描かれるようになった。例えばゲルマンとプレーヴェは、「ヴォルガ川右岸が掠奪者の跳梁跋扈する場所だとすれば、左岸の茫々たるステップに住む遊牧民のキルギス(カザフ)人やカルムイク人は、ロシアの臣民に数えられてはいたものの、国家の

-
- 1 モラヴィア教会、モラヴィア兄弟団とも呼ばれ、ロシアにおいてはヘルンフート派Гернгутеры、ヘルンフート兄弟団 Гернгутерское братство、サレプタ福音兄弟団 Сарептское евангелическое братство などの呼称も使われる。ドイツの兄弟団一般については次の文献を参照した。鍵和田賢「近世ドイツ兄弟団研究の現状と課題」『西洋史論集』12号、2009年、27-54頁。
 - 2 ツァリーツィンは1589年に建設された要塞から発展し、1925年にスターリングラード、1965年にヴォルゴグラードと名称を改められた。
 - 3 カルムイク人は、モンゴル系諸族のなかでもオイラトと呼ばれる西部モンゴル人に属し、その多くがチベット仏教を信仰する。カルムイク、カルミック、カルムックとも表現されるが、本稿ではカルムイクを採用する。現代カルムイク語ではХальмг、ロシア語では Калмык、英語では Kalmyk、Kalmuck、Calmouk、Qalmacなどと書かれる。
 - 4 サレプタの兄弟団自体は1892年に解散させられている。
 - 5 ヴォルガ・ドイツ人の強制移住については、半谷史郎「ヴォルガ・ドイツ人の強制移住」『スラヴ研究』47号、2000年、181-216頁を、カルムイク人の強制移住については、Эльза Гучинова, *Улица "Kalmyk Road": история, культура и идентичности в калмыцкой общине США* (Санкт-Петербург: Алтея, 2004) をそれぞれ参考にした。
 - 6 半谷史郎「フルシチョフ秘密報告と民族強制移住：クリミア・タタール人、ドイツ人、朝鮮人の問題積み残し」『ロシア史研究』75号、2004年、85-100頁。サレプタは1989年に歴史文化遺産として認められ、スターラヤ・サレプタ野外博物館となった。野外博物館公式サイト [<http://altsarepta.ru/ru/>] (2012年1月10日閲覧)。

目を掠めては、破壊と強奪をほしいままにしていた」と指摘する。⁽⁷⁾ また、プガチョフ蜂起の「最大の被災地は、ヴォルガ地方の最南端に位置する最富裕の入植地サレプタ」であり、「プガチョフ軍とカルムイク人部隊の無法行為によってサレプタが受けた損害」は甚大だったとする。⁽⁸⁾ 一方、季節に合わせて移動する遊牧民にとって、入植者は遊牧民の知らぬ間に草原を柵で囲い土地を掘り返す「侵入者」だった。特に乾燥ステップでは家畜の水飲み場をめぐる対立は深刻だった。⁽⁹⁾ あるカルムイク人はその苦境を嘆いて、ロシア政府はカルムイク人を「定住農民 *ansässige Landleute*」にするつもりであり、コサックやドイツ人移住者によって自分たちの土地が奪われていると述べたと伝えられている。⁽¹⁰⁾ このようにヴォルガ河下流域の入植者と遊牧民との遭遇は激しい摩擦と衝突を生んだ。

ただし、入植者と遊牧民について対立の構図のみで論ずることは、20世紀前半の強制移住まで続いたドイツ人入植者とカルムイク人遊牧民の関係の正確な理解に十分とは言えない。もちろん本稿の意図するところは、当時の混乱や暴力の構造を隠蔽することにあるわけではない。後述するように、隣人としてのカルムイク人とモラヴィア派入植者とのあいだには様々な分野での日常的な交流が見られ、それぞれの社会や文化を大きく変容させた。

以下では、まずボーデン Charles R. Bawden、アウグスティン Stephan Augustin、タイゲラー Otto Teigeler、シオルコヴィツ Dittmar Schorkowitzらの先行研究に基づき、サレプタ住民とカルムイク遊牧民の交流の歴史をその前半期について中心にまとめる。その後、モラヴィア派宣教師の残した記録の史料的可能性について考察する。

2. サレプタ入植地の建設と繁栄

2.1 入植の経緯

ロシアの農業開拓、手工業振興のためにもっとも有効だと考えられた解決策は外国人の入植を誘致することだった。18世紀のヨーロッパでは、少なからずの国々で外国人招致による人口増加が試みられていた。ロシア政府は、南部地域での支配の早期の確立を図るとともに、国境防衛の強化、手工業の振興、土地整理の実行といった課題のなかで、外国人入植による経済効果に強い関心を持っていた。⁽¹¹⁾ エカチェリーナ2世は1762年と1763年に勅令を發布して外国人の入植を呼びかけた。ヴォルガ河流域に建設された入植地は1764年から1768年のあいだに108カ所を数えた。モラヴィア派入植者による入植地サレプタの建設が始まったのは1765年9月3日のことである。⁽¹²⁾

7 アルカージー・A・ゲルマン、イーゴリ・R・プレーヴェ（鈴木健夫、半谷史郎訳）『ヴォルガ・ドイツ人：知られざるロシアの歴史』彩流社、2008年、28頁

8 同上、52頁。

9 Michael Khodarkovsky, *Where two worlds met: the Russian state and the Kalmyk nomads, 1630-1771* (Ithaca: Cornell University Press, 1992), pp. 220-227.

10 Benjamin Bergmann, *Nomadische Streifereien unter den Kalmüken in den Jahren 1802 und 1803*. vol. 1. (Riga: C. J. G. Hartmann, 1804), ss. 181-183.

11 Willard Sunderland, *Taming the Wild Field: Colonization and Empire on the Russian Steppe* (Ithaca: Cornell University Press, 2004), pp. 55-95.

12 Otto Teigeler, *Die Herrnhuter in Rußland. Ziel, Umfang und Ertrag ihrer Aktivitäten* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2006), ss. 287-399.

そもそもなぜモラヴィア派はロシア政府の入植招致に応じたのか。建設されたサレプタは、その他のヴォルガ河流域の外国人入植地に比べてかなり南に位置する。それはモラヴィア派の入植目的そのものが「異教徒」のキリスト教改宗にあったからである。

プロテスタント諸教会の世界宣教運動は、16世紀に始まるローマ・カトリック教会のそれよりも1世紀遅れて開始された。伝道の機運はオランダに起こり英国やドイツ語圏でも次第に高まった。のちにヘルンフート（主の守り）と呼ばれるようになるツィンツェンドルフ伯爵⁽¹³⁾の領地で1727年に設立された兄弟団は、その5年後の1732年にすでに西インド諸島での宣教を開始した。兄弟団結成から数十年のうちに、西インド諸島のセント・トマス島～ジャマイカ（アフリカ系奴隷）、グリーンランド～ラブラドル（イヌイット）、ラップランド（サーミ人）、オランダ領ギアナ（クレオール）、南アフリカ（コイコイ人）、ペンシルヴェニア～ノースカロライナ（北アメリカ先住民）など各地に宣教拠点が開設され、一部で布教の試みがなされた。⁽¹⁴⁾このような過程のなかでロシア、さらにアジアでの宣教が企画された。ロシアでの布教の許可を得るために、ツィンツェンドルフ伯の法律顧問だったニッチマン David Nitschmann de Syndikus（1703-1779）は1735年にサンクトペテルブルグを訪問した。しかし国内のルーテル派の存在を否定する宗務院の強い反対に遭い、ロシアでの活動は延期せざるを得なかった。ただし、この時の訪問でロシア、シベリア、カルムイク人の国、「タルタル国 Tartarn」、ペルシア、中国についての「知識」がヘルンフートにもたらされたという。⁽¹⁵⁾また、エリザヴェータ・ペトロヴナの治世においても皇帝は「異教徒」の改宗許可を口約束するのみで、モラヴィア派のロシアでの活動は一向に進展しなかった。⁽¹⁶⁾

転機が訪れたのはエカチェリーナ2世が即位してからである。先に述べたように、国内経済活性化のための外国人入植政策に強い関心を持っていた皇帝は、即位して間もなく1762年と1763年に相次いで布告を出して入植者を国外から徴募した。これらの布告の中でもヘルンフートのモラヴィア派にとって重要だったのは信教の自由についての規定である。入植者には、ロシア正教会の利益を侵害しないかぎりにおいて、自分たちの教会を建設すること、司祭・牧師を持つこと、伝統を保持し宗教儀式を執行することが認められた。⁽¹⁷⁾ロシア政府との折衝の末に、兄弟団はついにアストラハンとツァリーツィンの間に入植地をつくりカルムイク人などの異教徒に布教活動を行なう許しを得た。ロシアに建設される新しい布教の

13 ツィンツェンドルフ伯爵 Nikolaus Ludwig von Zinzendorf und Pottendorf (1700-1760) はキリストへの献身を誓い、信仰の自由を求めて逃れてきたモラヴィアのフス派、ルーテル派、カルヴァン派、再洗礼派などに自身の領地を開放した。1727年に「聖霊」の力を間近に感じる神秘体験を経て財産共同体が形成され、その監督にツィンツェンドルフが就いた。ヘルンフートの町は、現在ドイツのザクセン州ドレスデン行政管区ゲルリッツ郡に位置する。

14 宮本憲「モラヴィア派とその海外宣教事業—近代プロテスタント宣教運動の起源に関する一考察—」『キリスト教論叢』41号、2010年、51-70頁。

15 Teigeler, *Die Herrnhuter in Rußland*, s. 122. 1742年にも兄弟団は2人の宣教師をカルムイク人の許へ、さらにロシアを通過して中国へ送り込もうとしたがうまくいかなかったという。

16 Dittmar Schorkowitz, “Die Brüdergemeine von Sarepta. Innenansichten und Außenkontakte einer deutschen Kolonie an der Unteren Wolga,” *Ural-Altäische Jahrbücher: Neue Folge*, band 22, 2008, s. 249. なお、ショルコヴィツによるとロシアでの布教は北米をモデルとしていたという。

17 1782年から入植者の教会の管轄は外国人監督局とサラトフ監督署から県当局に移され、教会は社会生活と入植地管理の一翼を担った。特に教会が運営した学校は初等教育を入植者子弟に精神生活を涵養した点で重要である。

拠点、兄弟団の想い描く構想ではカルムイク人への宣教団の出発点、そしてアジアへの橋頭堡となるはずだった。⁽¹⁸⁾

2.2 サレプタの発展

1765年9月3日、ヘルンフートの5人の宣教師が先発隊としてカルムイク人の遊牧するステップの入口に到着した。彼らは、ヴォルガ河沿いのロシア要塞ツァリーツィンの南28キロメートル、ヴォルガ河の屈曲部でサルパ川との合流地に、宣教団の出発点としてサレプタの町を建設し始めた。1年後、ヘルンフートからのより大きな入植グループが後に続き、1768年にサレプタ福音兄弟団が設立された。

エカチェリーナ2世の布告を受けて形成された外国人入植地の中で唯一サレプタのみが首尾よく迅速に設置された。それは、バーレットが指摘するように、サレプタがより慎重に組織され、布教という特定の目的に専念させられ、ヘルンフートから物的に人的に支援を持続的に受けたからである。⁽¹⁹⁾ サレプタではその他の入植地とは精神的一体性が異なった。

サレプタの住民には手工業者が多かったため、また土地が塩分過多で耕作に適さなかったため、建設されたサレプタでは商業や手工業が振興され繁栄した。1768年に早くもタバコ工場が操業され、地元産タバコと輸入タバコの葉が加工された。セイヨウカラシの生産でもロシア中に知られるようになる。それらの産業の中でもっとも成功したのは織物業だった。サレプタで製造された綿織物は、地名にちなんでサルピンカと呼ばれ、ヴォルガ地域以外でもその名で生産されるようになった。

さらにもうひとつ、18世紀のサレプタに賑わいを与えたのは鉱泉の利用だった。サレプタ入植地の最初の医師を務めたヴィール博士 Иогани Иохим Вир (Иван Якимович Вир) は、1769年にサレプタから8キロメートル離れたエルゲニスキイエ丘陵の鉱泉を調査し、1775年に泥浴療法施設を備えた鉱泉湯治場を開いた。これは当時のロシア最大の鉱泉保養地で、鉱泉は皇帝の名を冠して「エカチェリーニンスキー」と呼ばれた。療養地には初め掘立小屋と浴場があるのみだったが、ツァリーツィン守備隊の兵士が利用し繁盛した。また、医師ヴィールは、湯治場のまわりに小さな商店を開いたり鉱泉水を他の町で販売したりした。次第に多くの人々が鉱泉を訪問するようになり、サレプタの成長をかなり後押しした。1780年代にはK.F. ラズモフスキー伯やオルロフ兄弟（長子И.Г.と末子B.Г.）などの政府高官も訪れたという。保養地としてのサレプタの人気は1796年に年間300人の来客でピークに達した。ただ、カフカス鉱泉が開発されるとときにその人気は翳り、地元住民が利用するのみとなった。⁽²⁰⁾

それにもかかわらず、サレプタの繁栄と名声はさらに高まり、19世紀の旅行者はわざわざ

18 Stephan Augustin, „Zur Geschichte ethnographischer Erkundungen bei den Kalmyken im Missionsgebiet der Evangelischen Brüder-Unität (Herrnhuter Mission) an der unteren Wolga,“ in Annegret Nippa, hrsg., *Abhandlungen und Berichte des Staatlichen Museums für Völkerkunde Dresden*, band 50 (Berlin: Akademie-Verlag, 1999), s. 218.

19 Roger P. Bartlett, *Human capital: the settlement of foreigners in Russia 1762-1804* (Cambridge: Cambridge University Press, 1979), pp. 104-105.

20 ブロックハウス＝エフロン百科事典のСарептские горькосоляные источникиの項目では、平均泉温は5月に16.1度、7月に23.9度とあるように冷泉で、アルカリ泉や鉄泉もあった。入浴、飲用とも可能だった。*Энциклопедический словарь – Брокгауз и Ефрон*, том XXVIII-а (Санкт-Петербург, 1900), С. 434.

何百ヴェルスタも遠回りをしてサレプタを訪れるほどだった。⁽²¹⁾ 後述するような学者たちの学術探検調査にとってもサレプタは重要な基地のひとつとしての役割を担った。⁽²²⁾

3. 接触の場として

3.1 商業、貴族文化、医療

ほぼ毎日サレプタ住民とカルムイク人との接触の機会があったようだ。家畜の群れを追って周辺を行き来しただけでなく、品物の売買のため、医療受診のためにカルムイク人はサレプタを訪れた。彼らの訪問は避暑や物見遊山でもあり、老若男女、家族を連れてサレプタの街を見てまわったという。⁽²³⁾ カルムイク人はサレプタ住民に畜肉（羊・牛）、馬・ラクダ、毛皮を売った。⁽²⁴⁾ 良質な原料を得てサレプタでは皮なめしが発達し、皮革製品が加工され販売された。⁽²⁵⁾ カルムイク人の側は、タバコ、ウォッカ、ブランデー、パン、織物、亜麻布、工具など様々な商品を買求めた。1771年にカルムイク人の多くが中央アジアに去ったことはサレプタ人が多くの顧客を失ったことを意味した。その2年後のプガチョフの乱とその混乱に乗じたカルムイク人による掠奪はサレプタにも甚大な被害を与えた。それでもサレプタの街はすぐに復興され、サレプタ住民とカルムイク人の商業的なつながりはその後もずっと維持されたのである。

このような日常的接触に加えて、カルムイク人の貴族との関係も急速に発達した。1766年6月に早くも兄弟団は当時のカルムイク人の指導者ウバシのもとを表敬した。そのウバシのライバルだった貴族ザミャンもすぐにサレプタの客となった。⁽²⁶⁾ カルムイク人貴族はステップでの移動天幕の生活を維持しつつ、サレプタで購入した家具や贅沢品にいち早く慣れていった。⁽²⁷⁾ 例えば、宣教師ツヴィク Heinrich August Zwick（1796-1855）がカルムイク人貴族のセルベジャブ・テュメン公に1823年8月13日に招待されたときの様子は次のようだった。このセルベジャブはナポレオンとの戦争でカルムイク人連隊を率いて活躍しパリを行進する榮譽を得た。帰還したセルベジャブはヴォルガ河左岸の畔にサンクトペテルブルグのカザン聖堂に模した楼閣を建設した。楼閣は高さ3階建て幅30歩で、樹木の少ないステップではかなり遠くからも見える大きさだった。内装もまたそれに劣らず豪華だったと宣教師ツ

21 Bartlett, *Human capital*, pp. 104-105.

22 Tuska Benes, "Comparative Linguistics as Ethnology: In Search of Indo-Germans in Central Asia, 1770-1830," *Comparative Studies of South Asia, Africa and the Middle East* 24, no. 2 (2004), pp. 117-132.

23 Christlieb Suter, *Geschichte der Gemeinde Sarepta 1765-1775*, Otto Teigeler, ed., 2nd ed., (Herrnhut: Herrnhuter Verlag, 2006), p. 50.

24 1771年の販売価格は、羊1頭50コペイカ、牛馬1ルーブル、ラクダ3ルーブルだった。Национальный архив Республики Калмыкия (НАРК), ф. 36 (Состоящий при калмыцких делах при Астраханском губернаторе), оп. 1, д. 52, л. 185.

25 В. Мягкая, "Немцы и калмыки. Взаимодействие культур," in *Wissenschaftliche Konferenz „Historische Beziehungen zwischen den Kalmücken an der Untern Wolga und der Gemeinde Sarepta vom 18. bis zum 20. Jahrhundert im Bereich Geschichte, Wissenschaft, Religion und Kultur“ vom 6. bis zum 13. April 2000 in Wolgograd-Alt Sarepta* (Wolgograd, 2001), ss. 362-368.

26 Schorkowitz, „Die Brüdergemeine von Sarepta,“ s. 245.

27 カルムイク人社会と外部社会との商業関係とその影響についてはホダルコフスキーを参考にした。Khodarkovsky, *Where two worlds met*, pp. 23-32.

ヴィクは伝える。ガラス製のシャンデリアや大きな鏡が掛けられたホールには、ピリヤード台、ピアノ、周辺民族の武器のコレクション、オルゴール時計、マホガニーの家具が備えられていて、小さな図書室もあった。庭園の離れでは、来客に3度蒸留したミルク酒が洒落たグラスで提供された。銀製の大鉢には鶏肉のスープ、さらにサイガ（レイヨウの一種）の肉やピクルスもあった。祝宴では10名から12名のオーケストラがドイツの交響曲や行進曲をロシア人の指揮で演奏していたという。⁽²⁸⁾

サレプタとカルムイク人のもうひとつのつながりが医療を通じたものだった。ロシア以外での宣教事業の経験を活かしてサレプタでは伝道のために医学処置や薬剤がカルムイク人に無料で提供された。診療による患者との接触を通してカルムイク人の語学や文化も伝えられた。また、サレプタの医師の中にはカルムイク人側の医学に関心を持つ者もいた。1864年には何人かの医師の有志でクミス（馬乳酒）治療の病院が建てられた。サレプタの薬剤師や医師は広くホメオパシーを利用し、チベット医学についても熱心に研究したという。⁽²⁹⁾

3.2 伝道と学問のあいだ

世界中で展開されたモラヴィア派の宣教活動の過程で、伝道団が接触する集団の言語や文化の研究は宣教活動の成否に決定的な意味を持つと認識されるようになった。1768年に2人の兄弟団のメンバーがカルムイク人と行動を共にするようになったのを最初に、積極的な関与による言語、生活習慣、宗教などのより深い知識の獲得が試みられた。例えば、医療助手のナイツ Conrad Neitz（1743-1815）は診療を通じてカルムイク語をよく学び、カルムイク人の「物語」を初めて記録した。⁽³⁰⁾ ナイツとカルムイク人の関係は親密なものであり、カルムイク人貴族ジルガラン・テュメン（セルベジャブの父）に宣教師のカルムイク語習得の手助けを依頼する手紙も残されている。⁽³¹⁾ こうして初期のカルムイク学は少しずつその歩みを開始した。

ロシアの東洋学はピョートル大帝から始まったと言われる。アジアでの商業的・政治的な野心を持っていたピョートル大帝は、ライプニッツ Gottfried Wilhelm von Leibniz（1646-1716）の助言に従って東洋に関する体系的で科学的な研究を組織化するために科学アカデミーを構想した。⁽³²⁾ 皇帝の死後に設立されたアカデミーは外国から学者を熱心に招聘

28 Heinrich August Zwick, *Reise von Sarepta in verschiedene Kalmücken-Horden des Astrachanischen Gouvernements im Jahr 1823 vom 26ten May bis 21ten August neuen Stils in Angelegenheiten der Russischen Bibel-Gesellschaft unternommen von Heinrich August Zwick und Johann Gottfried Schill und ersterem beschrieben. Mit 1 Charte.* Leipzig, 1827, ss. 161-162.; Teigeler, *Die Herrnhuter in Rußland*, ss. 430-431.

29 スターラヤ・サレプタ野外博物館旧薬局施設展示資料[閲覧2011年8月11日]。

30 Augustin, „Zur Geschichte ethnographischer Erkundungen bei den Kalmyken im Missionsgebiet der Evangelischen Brüder-Unität (Herrnhuter Mission) an der unteren Wolga,“ s. 218. ナイツの収集した情報は実際に他の研究に利用された。例えば、ベルグマン Benjamin Gustav Bergmann (1772-1856) の四巻本の著作 Benjamin Bergmann, *Nomadische Streifereien unter den Kalmüken in den Jahren 1802 und 1803* (Riga: Hartmann, 1804-1805) にもそれは反映された。

31 John Krueger, William Rozycki, Robert Service, „An Oirat-script Collection of Letters in the Staatsbibliothek zu Berlin,“ *Zentralasiatische Studien des Seminars für Sprach- und Kulturwissenschaft Zentralasiens der Universität Bonn* 29 (1999), s. 122.

32 David Schimmelpenninck van der Oye, *Russian Orientalism: Asia in the Russian Mind from Catherine the Great to the Emigration* (New Haven: Yale University Press, 2010), pp. 31-33. ライプニッツは晩年に

した。サンクトペテルブルグに集められた外国人、特にドイツ人の学者は学術探検を組織しロシア帝国およびその周辺地域の調査を行なった。グメリン Samuel Gottlieb Gmelin (1744-1774) やパラス Peter Simon Pallas (1741-1811) などの学者・探検家もサレプタを利用しカフカス、シベリア、中央アジアを旅行した。その際、カルムイク人の生活の様子も観察され記述された。サレプタは、カルムイク・ステップの入り口に位置する特別な場所であり、宿泊施設、商店、薬局など備えた調査旅行の理想的な拠点のひとつだった。

19世紀前半を代表する東洋学者の一人、シュミット Isaak Jacob Schmidt (1779-1847)⁽³³⁾ は初期カルムイク学の発達とモラヴィア派の宣教活動が交差するところに登場した。シュミットの学術活動はロシア帝国におけるプロテスタント宣教の新しい展開とちょうど時期が重なった。サレプタでは布教のためのカルムイク語翻訳作業が個人で行なわれていた。大工のマルチ Justus Friedrich Maltzsch (?-1778) は初めてカルムイク語で福音史家抄本を作成し、医療助手のナイツはキリスト受難の物語を翻訳した。18世紀末からスコットランドを中心に福音主義運動が高揚し、宣教師の活動の活性化、宗教的な出版物の増加、聖書協会の活動の盛り上がりが見られた。ロシアでの活動に関心を持っていた英国外国聖書協会とロンドン伝道協会はサレプタの聖書翻訳活動に注目し、1808年に早くもサレプタの兄弟団に聖書のカルムイク語翻訳を注文した。この翻訳依頼を引き受けたのがシュミットだった。⁽³⁴⁾ シュミットはアムステルダムのもラヴィア派の家庭に生まれ、1798年に教会の勧誘を受けてサレプタに移住した。サレプタではカルムイク人に対する信用貸付の仕事をし、そのかたわらでカルムイク語やモンゴル語に関する知識を収集した。彼は注文を受けて2カ月でマタイの福音書の翻訳を仕上げた。モスクワ滞在時に祖国戦争の被害を受けてそれまでの個人コレクションの大部分を失ったが、1813年にサンクトペテルブルグにロシア聖書協会⁽³⁵⁾ が設立される

中国研究に傾倒し、ロシアを東西の理想的な知的媒介者とみなしその可能性に期待していた。

- 33 シュミットはモンゴル語、チベット語に精通し多くの業績を残した。なかでも代表的なものとしてドイツ語訳『蒙古源流』(1829年)や『蒙独露辞典』(1835年)が挙げられる。*Geschichte der Ost-Mongolen und ihres Fürstenhauses, verfasst von Ssanang Ssetsen Chungtaidschi der Ordus; aus dem Mongolischen übersetzt und mit dem Originaltexte, nebst Anmerkungen, Erläuterungen und Citaten aus andern unedirten Originalwerken herausgegeben von Isaac Jacob Schmidt* (St. Petersburg: N. Gretschi; Leipzig: Cnobloch, 1829); Isaac Jacob Schmidt, *Mongolisch-deutsch-russisches Wörterbuch, nebst einem deutschen und einem russischen Wortregister* / Яков Иванович Шмидт, *Монгольско-немецко-русский словарь, с присовокуплением немецкого и русского алфавитных списков* (Leipzig: Leopold Voss; Санктпетербург, Греше и Глазуновас, 1835).
- 34 シュミットは、1807年から1812年にサラトフの教会で働き、1812年からモスクワ、サンクトペテルブルグに移った。また、彼は英国外国聖書教会のスコットランド人宣教師ピンカートン Robert Pinkerton (1780-1859) とは姻戚関係にあった。ピンカートンは北カフカスのカラス Карас (ピチゴルスクの北10km地点で、エディンバラ聖書協会の宣教師の入植地) で宣教活動を行い、ロシア聖書協会の設立に関わった人物である。シュミットは翻訳作業を通じてパターソン John Paterson (1776-1855) やヘンダーソン Ebenezer Henderson (1784-1858) などの聖書普及運動の活動家とも知り合った。Charles R. Bawden, *Shamans, lamas, and evangelicals: the English missionaries in Siberia* (London: Routledge & Kegan Paul, 1985), pp. 20-21, 29, 47.; Стивен Багалден, “Мусульманский и еврейский вопросы в России эпохи Александра I глазами шотландского библиста и путешественника,” *Вопросы истории*, no. 5 (2004), С 46-63.
- 35 ロシア聖書協会は1813年に英国外国聖書協会の支部として誕生した。協会は宗務総監のゴリツィン公 Александр Николаевич Голицын (1773-1844) を総裁とし、アレクサンドル1世の支持を受けて運営された。その主な活動は、教会スラブ語訳聖書、その他ロシア帝国内外諸民族向けの聖書を作成し頒布することだった。1822年には他の地域と同様にサレプタにもロシア聖書協会の支部

と、シュミットは会計係の仕事とともに聖書のカルムイク語、モンゴル語の翻訳事業を任された。カルムイク語のトド文字活版は1814年に鑄造され、1815年には印刷が行なわれた。こうして、サレプタ人の布教活動は時代の潮流に乗り、うまくいくかに見えた。

確かにシュミットのカルムイク語翻訳はカルムイク人に無料配布されたが、それだけでカルムイク人が改宗することはなかった。実際には、宣教師たちに異教徒へのキリスト教普及は許可されていたが、洗礼の許可は与えられていなかったのである。⁽³⁶⁾ 1826年にはロシア聖書協会は解散し、モラヴィア派は強力な後ろ盾を失った。⁽³⁷⁾

このように宣教活動自体はあまり成功しなかったと言われるが、19世紀第1四半期の新展開は次の2点について重要である。ひとつは、その学問上の意義である。シュミットがカルムイク・ステップで獲得した知識は、英国外国聖書協会、ロンドン伝道協会、ロシア聖書協会の支援によって広く世に知られ、ヨーロッパのモンゴル研究、チベット研究の発展に大きく寄与した。もうひとつの意義は、カルムイク人への布教とブリヤート人の布教とのあいだにつながりが生まれたことである。カルムイク語翻訳の作成において、ブリヤートにおける布教運動の実践的知識が活用された。例えば、翻訳にブリヤート人貴族の意見を取り入れたり、「西洋的な教え」を抑制し「東洋的な考え方」の論述に「適応」させたりして改良が行なわれた。また、シュミット翻訳のマタイの福音書はイルクーツク民政知事トレスキン Николай Иванович Трескин に送り届けられ参考意見が求められた。⁽³⁸⁾

3.3 サレプタ宣教師の記録：史料としての可能性

世界中で活動していた宣教師たちの日記、日誌、その他の記録は、語り手の宣教師のまなざしや認識に依存し作為など考慮すべき様々な問題を抱えているが、特に布教対象との会話の記録は臨場感があり史料として非常に貴重である。サレプタの宣教師の記録もまたそうである。一例をあげれば、1820年の新年祝賀会で貴族セルベジャブ・テュメン公はある宣教師に向かって「フランスに行きそこの人々にお上りに刃向うことはいかに罪であるか教えた方がいいでしょう、あそこでは平民の「啓蒙された」成果が明らかになっていますから」と述べたという。⁽³⁹⁾ フランス軍と戦いパリを行進したセルベジャブ・テュメンの言葉だけにかなり辛辣である。ショルコヴィツはこの発言の背景にキリスト教改宗による属民の離反に対す

が設立された。しかし、1824年にゴリツィンが総裁職を辞すると活動を休止し、アレクサンドル1世の保守化、正教会や保守派の反発、ニコライ1世の即位を機に1826年に解散した。Bawden, *Shamans, lamas, and evangelicals*, pp. 13-14.; 兎内勇津流「ロシア聖書協会と聖書ロシア語訳事業：歴史的位置付けについての覚え書き」『スラヴ研究』50号、2003年、305頁。

36 D. S. M. Williams, "The 'Mongolian Mission' of the London Missionary Society. An Episode in the History of Religion in the Russian Empire," *The Slavonic and East European Review* 56, no. 3 (1978), p. 336.

37 Dittmar Schorkowitz, "The Orthodox Church, Lamaism, and Shamanism among the Buriats and Kalmyks, 1825-1925," in Geraci, R.P. and Khodarkovsky, M. eds., *Of religion and empire: missions, conversion, and tolerance in Tsarist Russia* (Ithaca: Cornell University Press, 2001), p. 211.

38 Schorkowitz, „Die Brüdergemeine von Sarepta,“ ss. 253-254. ただし、正教の布教や民族行政など他の分野におけるカルムイク人とブリヤート人の関係はより詳細な考察を必要とする。

39 Alexander Glitsch, *Geschichte der Brüdergemeine Sarepta im östlichen Russland während ihres hundertjährigen Bestehens. Nach archivalischen Quellen bearbeitet* (Sarepta: Selbstverlag des Verfassers, 1865), s. 302. グリッチ Glitsch についてはタイゲラー Teigeler, *Die Herrnhuter in Rußland*, ss. 29-30. を参照した。

る警戒だけでなく、教化によって平民が知識を持つことそのものに対する専制体制的な憂慮があったと指摘する。⁴⁰⁾ その一方で、セルベジャブ自身は、本稿3.1で取り上げたように、サンクトペテルブルグの建築物や生活をカルムイク風に再現し披露した。このように、宣教師の記録に残るカルムイク人とのやり取りへの注目は啓蒙やフランス革命に対する認識を推察させ、彼らの心性への接近を可能にしうる。

次に宣教師シューターの記録を見てみよう。シューター Christlieb Suter (1740-1811) は1766年に最初の開拓団メンバーとしてサレプタに入植し、サレプタ入植からの10年間の記録を720ページにわたって詳細に綴った。例えば、1766年冬の記録によれば、若い宣教師がカルムイク語の習得のために近くの冬営地天幕を訪問すると決まってカルムイク人は次のように語ったという。「我々の昔の国の人々に予備知識があって我々の故国を離れたのでしょうか、それとも予備知識なしで離れたのでしょうか？我々は自由の民だったのでしょうか、どんな目的があって我々はこの地に腰を下ろしたのでしょうか？我々是我々自身でこの土地を選んだのでしょうか、それともそれは我々に国の政府によって譲られ、あてがわれたのでしょうか？我々はこの土地が本当は人のものだと知っていたのでしょうか？」⁴¹⁾ 当時、肥沃な土地には農民やコサックが移り住み、次第にヴォルガ・ステップはカルムイク人の自由にはならなくなっていた。そのため、カルムイク人は「故郷」のジュンガリアに戻る計画を立てていた。カルムイク人は決まった発言をしては入植者である宣教師の反応を観察していたようだ。⁴²⁾

次の記述も興味深い。シューターの記録に宣教師ハメルス Christian Hammelsの報告として臨終を迎える僧侶の様子が描かれている。これは1771年8月18日、つまり、すでに多くのカルムイク人が中央アジアに去った後のことである。たまたまカルムイク人の営地に滞在していた宣教師ハメルスは死の病気に罹った僧侶のところに呼ばれ、患者が治るかどうか尋ねられたという。ハメルスは、その病気の僧侶がかなり衰弱しすでに声を発することもできないため、僧侶が病から回復することはないと判断した。それを聞くと僧侶たちは法要を始め、病床の僧侶の財産である馬15頭、雌牛6頭、羊12頭、現金50ルーブルを8人の僧侶で分配した。数年前に任務でダライ・ラマの許に派遣されていたという9番目の僧侶イシェ・ゲリュンは「病人のための法要がどれほど行なわれていなかったということでしょうか、病人は死んでしまいました！」と述べ、「我々が我々の古い先祖がしてきたように金儲けなしで神に祈れば、もちろんもともとずっと効果がありました。しかし我々の古い教えはどこにありますか、いったいなぜ法要を行なわなければならないことが顧みられないのですか？」と嘆いたという。⁴³⁾ これは宣教師の側の作為の可能性も疑われるべき事例だが、少なくとも次のように指摘することができる。診療や薬剤より法要が患者の回復にとって重要だとみなされていたこと、「古い教え」が本来の姿で現在は逸脱状態にあるという考えに則っていたこと、

40 Schorkowitz, "Die Brüdergemeine von Sarepta.," ss. 253-254.

41 Suter, *Geschichte der Gemeinde Sarepta 1765-1775*, ss. 75-76.

42 推測の域を出ないが、実際に行動を起こす前に故意に情報を流して反応を見るということが行なわれていた可能性はある。例えば、後世1877年にドン軍州の高僧ロマン・マンジコフはチベット巡礼に出発するかなり以前から盛んに周囲にチベット行きを語っていたという。"Буддийские пилигримы," *Донские областные ведомости* (г. Новочеркасск), № 81, 18 октябрь 1878 г., с. 3 (Неофициальная часть).

43 Suter, *Geschichte der Gemeinde Sarepta 1765-1775*, ss. 221-222.

そして、その正しい「古い教え」とダライ・ラマは結びつけられていたということである。⁽⁴⁴⁾

宣教師の記録は、史料として魅力的である一方で、特に最後の事例からも分かるように、取り扱いに慎重さが求められその他の情報と組み合わせてうまく利用されるべきものと言えよう。この10年ほどサレプタの宣教師たちの記録や書簡に注目が集まっている。宣教師の記録からは当時のカルムイク人の世界観や社会認識などを垣間見ることが可能であり、従来の研究で欠落していた部分を補完することが期待されるからである。ロシア当局の公文書だけでなく様々な他者のまなざしに注目することも複眼的な歴史記述のために求められている。

4. むすびにかえて

カルムイク人とサレプタ住民との交流は日常的で密接なものだった。のちに史上初めてチベット・ラサの写真撮影に成功するカルムイク人ノルズノフ Овше Мучкинович Норзунов (1874-?) は、1898年、ラサまでの道中にブリヤート人の土地に立ち寄った。「同じモンゴル系民族」と言われるブリヤート人の家を初めて見て、ノルズノフは「ブリヤート人は薄板で覆われたドイツ型の家に住んでいる」と感想を述べた。⁽⁴⁵⁾ 当時のカルムイク人にとってドイツ人の家の方がずっと見慣れた存在だったということであろう。また、アウグスティンによれば、19世紀の終わりにはサレプタで仏像やマニ車の製造、チベット語の活版印刷まで行なわれていたという。⁽⁴⁶⁾ それほど近接した関係を両者は築いていたようだ。

本稿は19世紀前半までのサレプタでの交流の歴史を描くに留まった。19世紀後半－20世紀前半におけるカルムイク人とサレプタ住民も特別な関係にあり続けたと予想されるが、両者の関係の発展、相互変容の過程を明らかにするのは今後の課題とする。

【付記】

なお、本稿の執筆にあたり、科学研究費研究基盤A『ヴォルガ文化圏とその表象に関する総合研究』(平成21-23年度)、および日露青年交流センター『2011年度日露青年交流事業若手研究者等フェローシップ《日本人研究者派遣》』から支援を頂いた。ここに深く感謝の意を表する。

44 1810年のストラホフの記述もカルムイク人の宗教が本来の姿から逸脱しているという類似の論法を使用している。Н. Страхов, *Нынешнее состояние калмыцкого народа, с присовокуплением Калмыцких законов и судопроизводства, десяти правил их Веры, молитвы, правоучительной повести, сказки, пословиц и песни Савардин* (Санкт-Петербург:Шнора, 1810).

45 А.В. Бадмаев, “Развитие калмыцкой литературы (XIX – начало XX вв.),” *История калмыцкой литературы*. Том.1. Дюктябрьский период (Элиста: Калмыцкое книжное издательство, 1981), С. 265-266.

46 Augustin, „Zur Geschichte ethnographischer Erkundungen,“ ss. 229-230.